

養護教諭の実践力育成をめざした学習の展開 — 「養護学演習Ⅰ」「養護学演習Ⅱ」の授業例—

The Development of "Seminar of *Yogo* Science and Art" for *Yogo* Teacher's Practical Ability

今 野 洋 子

IMANO, Yoko

キーワード：養護教諭養成、実践力育成、養護学演習

要約

実践的指導力のある教員養成が求められる中、養護教諭養成においても実践力育成を目指した教育が必要である。その取組の好例として、仮想学校を舞台とした授業展開例がある。そこで、本稿は、先駆的な「仮想学校」の授業構想に学び、本学で工夫を加えつつ開講した「養護学演習Ⅰ・Ⅱ」の展開と学生の学びを紹介する。

「養護学演習Ⅰ・Ⅱ」は、①養護教諭が直面するであろう実践場面を仮想学校の条件下で設定する、②年間保健計画案など実際に作成する実習課題を与える、③作成資料等に対して学生一人ひとりが考える場としてグループ討議を行わせる、④グループの発表に対する質疑応答を行わせる、という4つの授業過程から成る。

学生の感想から、学習の深化や態度の変容、養護教諭の実践を実習として学ぶ意義を捉えることができた。

Key Words : Practical Expertise of *Yogo* teacher, *Yogo* teacher Training, Seminar of *Yogo* Science and Art

I はじめに

養護教諭は、世界に類をみない、日本固有の専門職である。

近年、学校における教育課題は多様化・複雑化しており、教員に対して「いつの時代にも求められる資質能力」とともに「変化の激しい時代にあって、子どもたちに〔生きる力〕を育む観点から求められる資質能力」とが求められるようになった¹⁾。このような資質能力を基盤に、現在、実践的指導力を備えた教員の養成が課題となっている²⁾。

中央教育審議会「今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）」において、実践的指導力の育成が必ずしも十分でないとの指摘³⁾がなされたうえで、日本の教員養成に関して、

教職大学院設置・教員免許更新制の導入や教職実践演習の導入など実践的指導力の育成を目指す施策が続々と打ち出された。「学校におけるすべての教育活動を通して、ヘルスプロモーションの理念に基づく健康教育と健康管理によって、子どもの発育・発達の支援を行う特別な免許を持つ教育職員である」⁴⁾養護教諭についても、同様に実践力向上の重要性が指摘されている⁵⁾。

養護教諭養成に関しては、これまで、日本教育大学協会全国養護部門研究委員会において養護実践力の育成をめざしたカリキュラムの統合や教育方法・授業方法の検討がなされ⁶⁾、研究成果としてモデル・コア・カリキュラムが提言⁷⁾された。しかし、すべての養成機関において目標の共通化が図られたわけではなく、モデル・コア・カリキュラムの実現に至っていない。養護教諭における実践力向上は、他の教諭同様に喫緊の課題でありながら、養護実践力の育成という観点からの検討は、ほとんど行われていない現状がある。

一方、後藤（2008）は、仮想学校を舞台とした授業⁸⁾⁹⁾を展開しており、実践力育成を目指して先進的に取り組んでいる好例といえるが、このような例は他にはほとんどみられない。斉藤ら（2008）は、養護教諭の実践力育成につながるような体験的科目が開講されていないことを明らかにしており¹⁰⁾、このことから養護実践力育成という視点での教育はほとんど行われていないといえる。

そこで、本稿は、先駆的な後藤の授業構想に学び、養護実践力育成を目指す授業のあり方を検討し、本学で工夫を加えて開講した「養護学演習Ⅰ・Ⅱ」の展開を紹介するものである。

なお、本稿において、養護実践力とは「児童・生徒等の心身の健康の保持増進をはかるために目的を持って意識的に行う力であり、実践の教育的価値を省察し熟考する力である」¹¹⁾という捉え方を採用する。

Ⅱ 実践力育成の取り組み

1. 養成の課題と科目構成

本稿で対象とした「養護学演習Ⅰ」「養護学演習Ⅱ」は、教育職員免許法施行規則に規定される「養護概説」に含まれる。

教育職員免許法上の「養護概説（2単位）」に対し、本学では相当する科目として「養護学総論（1年前期・2単位：免許取得上必修科目）」、「養護学各論（1年後期2単位：免許取得上選択科目）」、「養護学演習Ⅰ（3年前期2単位：免許取得上選択科目）」、「養護学演習Ⅱ（3年後期2単位：免許取得上選択科目）」の4科目8単位分を開講している。

大谷ら（1999）は、国立教育学系四年制大学のカリキュラムで、「養護概説」は教育職員免許法に定められた最低習得単位数を上回って開講している実態を1996年実施の調査結果として、報告した¹²⁾。斉藤ら（2008）は、「養護概説（必修）」が、教育免許法施行規則に規定されている最低履修単位2単位を超えて開講している大学が少なくない¹³⁾ことを報告したが、6割の大学が最低2単位分の開講であり、わずか2単位の「養護概説」の中で理論のみならず養護実践

の内容や方法を取り上げている実態についても指摘¹⁴⁾している。このような養成機関による違いは、養護教諭が教育職員でありながら他の教員養成とは異なる問題を有してきた¹⁵⁾ことと関連している。

一般教諭養成では、「教職経験のない学生は授業をルーチン化された伝達行為と捉えているが、熟達教師は児童・生徒との共同の営みであると捉えている」¹⁶⁾ことに着目し、学内での模擬授業を体験させることで、「模擬授業によって学習者観や授業観が変化する」ことが実証されており¹⁷⁾¹⁸⁾¹⁹⁾、教員志望学生は、教育実習前に、指導案作成や模擬授業を体験して実習に臨むことが当然となっている。養護教諭養成においては、教育実習と同様に養護実習に臨むことが必須であるにも関わらず、必ずしも系統的な体験的・実習的授業カリキュラムで学ばせるには至っていない。つまり、「養護実習」が養護教諭の実践そのものについて学ぶものであるにも関わらず、学内で実践的に学ぶ機会が少ないことは、養護教諭養成上の課題である。

なお、専門的能力向上のためのモデルとして有効とされる「内省モデル（図1参照）」では、知識だけでなく、実践的活動と内省を繰り返すことにより、専門的能力の向上につながるが示されている。養護実践力を高めるためには、養護実習を中核として、「実践的活動」と「内省」という過程を取り入れた学習を位置づける必要がある。

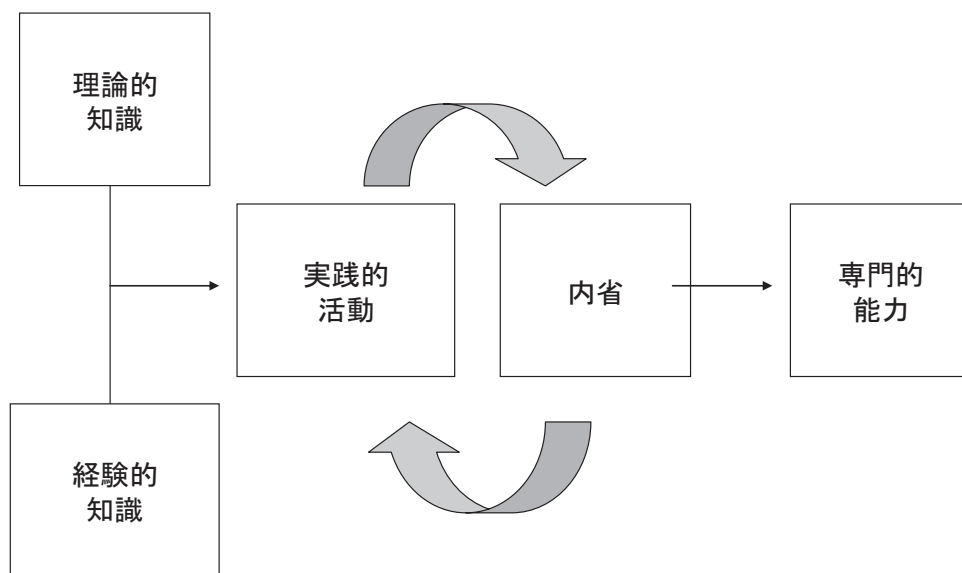


図1 Wallaceの内省モデル (1991) ²⁰⁾

近年の教師教育において、教育実践の質を総合的に向上させていく実践的指導力の中核は「実践的状况における省察 (reflection) と熟考 (deliberation)」であることが指摘されており²¹⁾、このことは養護教諭の実践力育成を目指した授業構想においても重要な点である。

2. 養護実践に結びつく科目群

表1は、2008年度に筆者が担当した授業科目を示したものである（表1参照）が、養護学演習に深く結びつく科目群であり、その科目構成を示すものといえる。

表1 養護実践に関連する科目群

科目名	開講時期	単位	履修条件	
養護学総論	1年前期	2	必修（専門科目）*	養護概説
養護学各論	1年後期	2	選択（専門科目）	養護概説
健康相談活動の理論と活用	1年後期	2	必修（専門科目）	健康相談活動の理論及び方法
健康相談活動演習	2年前期	2	選択（専門科目）	健康相談活動の理論及び方法
養護実習講義	2年後期	2	必修（専門科目）*	養護実習
養護実習オリエンテーション	2年 3月集中	4	必修（教職科目）	養護実習
養護実習	3年前期・後期			
養護学演習Ⅰ	3年前期	2	選択（専門科目）	養護概説
養護学演習Ⅱ	3年後期	2	選択（専門科目）	養護概説
総合演習	4年前期	2	必修（教職科目）	総合演習

1年前期の「養護学総論」は、養護教諭のしごとや専門性について学ぶものであるとともに、養護教諭への動機付けを高めるための役割を持つ。また、本学のカリキュラムが、どのように養護教諭としての学びにつながるかを見通すことにもつながる。1年後期の「養護学各論」では養護教諭の実践の基礎を体験的に学ぶ演習的な内容が含まれ、グループワークで救急処置活動の寸劇を行う、保健指導のスタンプラリーを行う等、活動的な場面を多く取り入れた授業である。同じ1年後期に開講される「健康相談活動の理論と活用」も、モデルシラバス²²⁾に従って構成された演習の内容の多い授業で、専門性を生かし養護教諭固有といわれる健康相談活動²³⁾²⁴⁾の基礎を学ぶ。

2年前期の「健康相談活動演習」では、1年後期に培った基礎や知識を生かし、ロールプレイングを中心とした体験的学習で学ぶ。2年後期の「養護実習講義」および「養護実習オリエンテーション」はそれまでの学びを総合し、3年前期・後期の養護実習での実践を意識した学習である。

なお、本学では、学生の養護実習は概ね4～6月に行われ前期間中に終了するが、一部の学生の実習が9月あるいは10月に終了する場合があります。養護実習期間を「前期・後期」と表記した。

3年次の「養護学演習Ⅰ」「養護学演習Ⅱ」は養護実習での実践を意識した学習であるとともに養護実習での実践を深化させる学習でもある。養護教諭の日々の実践について教育的価値を考えながら学ぶ授業である。

なお、4年次における「総合演習」はそれまでの系統的な学習を踏まえ、現代的課題を追究するものである。

3. 学内学習の系統性

特に、「養護学総論」「養護学各論」「養護実習講義」「養護学演習Ⅰ」「養護学演習Ⅱ」との結びつきは密接であり、その内容を表2に示した（表2参照）。

「養護学総論」の中の「6.健康実態・健康問題の把握」では、養護教諭がどのように健康観察・健康調査・健康診断を行い、そこからどのように子どもの健康実態や健康課題を把握するか

表2 学内学習の関連

養護学総論	養護学各論	養護実習講義	養護学演習Ⅰ	養護学演習Ⅱ
1. 教育に果たす養護教諭の役割	1. 保健室の機能と養護教諭	1. 養護実習の概要	1. 仮想学校①づくり(学校環境・学校規模)	1. 自己目標の発表・ほけんだより発表
2. 養護の概念	2. 救急処置の実際	2. 健康観察・出席停止	2. 仮想学校づくり②(教職員・教育目標・学校行事等)	2. 養護教諭の執務計画(1日・月別)
3. 養護教諭の専門性	3. 子どもに多い病気と保健指導	3. 救急処置活動・災害報告書作成	3. 学校保健計画の作成	3. 複数配置での執務計画
4. 養護教諭の歴史から探る養護実践	4. 感染症(伝染病)予防と健康管理	4. 健康相談活動・学校環境衛生活動	4. 保健室経営案の作成、年間執務計画	4. 健康診断実施計画の検討(職員会議での提案)
5. 養護活動の拠点としての保健室	5. 各種健康診断の目的と方法	5. 保健教育(保健指導・保健学習)	5. 諸表簿・文書・記録物の作成	5. 保健指導(含個別指導)実施計画の検討(職員会議での提案)
6. 健康実態・健康問題の把握	6. 保健調査作成	6. 保健学習・指導案作成	6. 諸表簿・文書・記録物の活用	6. 健康診断の結果・事後措置についての提起(職員会議での検討)
7. 救急処置活動・健康相談活動	7. 計画・立案①学校保健計画案 ②保健室経営案	7. 健康診断の計画および運営	7. 組織的な活動の進め方①校内の連携及び体制	7. 学級での保健指導:養護教諭と担任がTTで行う授業
8. 健康教育活動	8. 五感にふれる掲示物作成	8. 救急処置活動実習	8. 組織的な活動の進め方②校外の連携及び体制	8. 個別保健指導:継続指導と保護者との連携
9. 学校環境づくり:感染症予防と環境衛生整備	9. 保健指導・保健学習・指導案作成の要領	9. 公文書の書き方・記録と考察	9. 児童生徒個々への対応①個別保健指導	9. 組織活動:学校保健委員会の開催(健康診断結果から)
10. 組織としての展開・関係機関との連携	10. 保健指導の機会・指導案作成	10. 保健教育としてのほけんだより	10. 児童生徒個々への対応②健康相談活動	10. 保健学習:3年生対象の授業、5年生対象の授業
11. 養護教諭の研究	11. 性に関する保健指導	11. 三計測実習	11. 児童生徒の健康実態の捉え方①社会的視点から	11. 特別支援教育対象の児童への養護実践
12. 期待される養護教諭像と求められる能力	12. ほけんだよりコンテンツ	12. 視力検査実習	12. 児童生徒の健康実態の捉え方②健康観察活用の視点から	12. インフルエンザの流行への対応
13. 事例検討①健康観察・健康診断	13. 模擬保健指導	13. 聴力検査実習・ぎょう虫卵検査・尿検査	13. 養護学演習Ⅰのまとめ・後期の課題	13. 環境衛生の日常点検
14. 事例検討②学校教育としての養護実践	14. 養護教諭のしごとの評価	14. 歯科検診・各種検診の事後措置	14. 養護学演習Ⅰでついた力	14. 学校の規模や地域特性と養護実践
15. まとめ(試験)	15. まとめ(試験)	15. まとめ(試験)・ノートまとめ	15. まとめ(レポート)	15. まとめ(レポート:養護学演習の総括)

実践の概要について学ぶ。このことを基礎に、「養護学各論」の「6. 保健調査作成」では、具体的に養護教諭の実践の場面を考えながら、健康実態・健康課題を把握するため、保健調査票を作成し検討を行う。また、健康実態や健康課題を把握したことを踏まえ、具体的に「養護学各論」の「7. 計画・立案」で、学校保健計画案や保健室経営案を作成する。

さらに、これら「養護学総論」および「養護学各論」で学んだ子どもの健康実態・健康課題の把握の概要と実際は、「養護実習講義」における「2. 健康観察・出席停止」や「7. 健康診断の計画および運営」の学習に発展する。養護実習講義では事例を設定して学ばせるが、「2. 健康観察・出席停止」では、朝の健康観察時に「麻疹の症状を訴える子どもがいる」という事例について、健康観察で何を把握するか、保健室ではどのようなアセスメントを行うか、養護教諭はどのように行動するか検討する。このように考え、検討することの積み重ねが授業中に行われる。

「養護学演習Ⅰ」での仮想学校における「3. 学校保健計画の作成」「4. 保健室経営案の作成、年間執務計画」等は、子どもの健康実態・健康課題の把握が基盤となり、それまでの学習

の深化が図られる。「養護学演習Ⅱ」では、「4. 健康診断実施計画の検討（職員会議での提案）」において、養護教諭が捉えた子どもの健康課題を、教育活動として展開する中でいかに解決していくかを提案し、検討する。あるいは、「12. インフルエンザの流行への対応」で、健康観察でとらえた健康実態をどのようにして迅速かつ正確に処理するか考え、検討する。健康診断や感染症予防のような保健管理面からだけでなく、「5. 保健指導（含個別指導）実施計画の検討（職員会議での提案）」で保健教育における実践のあり方を考えていく。さらに、「9. 組織活動：学校保健委員会の開催（健康診断結果から）」において、保護者や地域を巻き込んで、学校保健活動を推進していく。

このように養護実践に関する科目群は有機的に関連付け構成されている。

4. 「養護学演習」授業の概要

「養護学演習Ⅰ」「養護学演習Ⅱ」の授業の内容は、表3および表4に示した通りである（表3・表4参照）。

表3 「養護学演習Ⅰ」の概要

養護学演習Ⅰ	授業概要
1. 仮想学校①づくり（学校環境・学校規模）	・本演習のねらいおよび方法を知る。仮想学校づくりとして、学校環境・学校規模・学校名を決定し、本演習の舞台となる仮想学校を作る。
2. 仮想学校づくり②（教職員・教育目標・学校行事等）	・仮想学校における教職員組織、学校教育目標、学校行事等についてグループで審議したものを提案し、検討する。
3. 学校保健計画の作成	・学校行事や学校環境、子どもの実態を踏まえ、学校保健計画を提案し、検討、審議する。
4. 保健室経営案の作成、年間執務計画	・学校教育目標や保健計画を考慮した保健室経営案および年間執務計画を提案し、審議する。
5. 諸表簿・文書・記録物の作成	・学校保健に必要な諸表簿・文書・記録物の種類、作成上の留意点について確認する。
6. 諸表簿・文書・記録物の活用	・作成した学校保健に必要な諸表簿・文書・記録物の使用場面を考え、検討、修正する。
7. 組織的な活動の進め方①校内の連携及び体制	・具体的な事例を示し、問題解決のための具体的な校内連携のあり方を検討し、整理する。養護教諭が校内連携で果たすべき役割について、確認する。
8. 組織的な活動の進め方②校外の連携及び体制	・具体的な事例を示し、問題解決のための具体的に校外のどのような機関と連携すればよいか検討し、整理する。養護教諭が連携で果たすべき役割について、確認する。
9. 児童生徒個々への対応①個別保健指導	・健康診断後、把握された具体的な児童の課題を示し、個別保健指導を計画・実践する。保健指導の場面をロールプレイングする。
10. 児童生徒個々への対応②健康相談活動	・保護者から相談を受けた具体的な児童の課題を示し、健康相談活動を計画・実践する。健康相談活動の場面をロールプレイングする。
11. 児童生徒の健康実態の捉え方①社会的視点から	・日本の問題、市の問題、仮想学校の子どもたちの課題を改めて検討する。
12. 児童生徒の健康実態の捉え方②健康観察活用視点から	健康観察結果をどのような過程で教職員に伝えるか、保護者へ伝えるか検討する。
13. 養護学演習Ⅰのまとめ・後期の課題	レジュメ作成の確認をし、他大学の授業DVDをみるなどして実践的に学ぶ意義を知る。
14. 養護学演習Ⅰでついた力	本授業でついた力を検討する。
15. まとめ（レポート）	

表4 「養護学演習Ⅱ」の概要

養護学演習Ⅱ	授業概要
1. 自己目標の発表・ほけんだより発表	・自己目標を発表する・ほけんだよりを発表し、一番よいものを決定する。ほけんだより作成の工夫点を検討する。
2. 養護教諭の執務計画（1日・月別）	養護教諭の執務計画（1日・月別）を提案し、検討する。
3. 複数配置での執務計画	複数配置を仮定し、複数配置での執務を計画を提案し検討する
4. 健康診断実施計画の検討（職員会議での提案）	健康診断の実施計画を職員会議で提案し、検討する。
5. 保健指導（含個別指導）実施計画の検討（職員会議での提案）	養護学演習Ⅰでの保健指導や子どもの健康課題を念頭に、保健指導の計画を提案し、検討する。
6. 健康診断の結果・事後措置についての提起（職員会議での検討）	健康診断の結果と課題を教職員に伝え、課題解決のための対策を検討する。
7. 学級での保健指導：養護教諭と担任がTTで行う授業	担任と養護教諭、特別支援担当教諭がともに協力して、歯の保健指導を実施し、授業終了後検討する。
8. 個別保健指導：継続指導と保護者との連携	個別保健指導を継続していく上で、評価・問題の分析を行うとともに、保護者との面談を実施し、保護者の協力を得られるようにする。
9. 組織活動：学校保健委員会の開催（健康診断結果から）	健康診断の結果を踏まえ、学内にとどまらず、地域や保護者と協力しての組織活動として運営するためにどうするか検討する。
10. 保健学習：3年生対象の授業、5年生対象の授業	対象学年の異なる保健学習を実施し、留意点や保健指導との関わりを検討する。
11. 特別支援教育対象の児童への養護実践	特別支援教育対象の子どもの事例に基づき、養護教諭としてどう支援するか、特に学級担任・保護者との連携をどうするか検討する。
12. インフルエンザの流行への対応	健康観察の結果をもとに、インフルエンザ対策としての措置対応を検討する。
13. 環境衛生の日常点検	環境衛生の日常点検について、点検事項、清掃区域・清掃の仕方、飼育環境整備等を検討する。
14. 学校の規模や地域特性と養護実践	大きな地震災害の後、PTSD等を視野に入れた子どもの健康管理・健康教育を検討する。
15. まとめ（レポート：養護学演習の総括）	

「養護学演習Ⅰ・Ⅱ」は、①養護教諭が直面するであろう実践場面を特定の学校の条件で設定する②年間保健計画案など実際に作成する実習課題を与える、③作成資料等に対して学生一人ひとりが考える場としてグループ討議を行わせる、④グループの発表に対する質疑応答を行わせる、授業過程から成る。

2008年度は、児童数546名、20学級（特別支援教育学級2クラスを含む）の学校規模、「青空市立花園ことり小学校」という学校名、学校教育目標は、「優しい子…物事をよく考え、思いやりを持つ子 たくましい子…身体を強くし、明るい子ども 考える子…自ら進んで学習する子ども」と設定した。この小学校には「子どもが大好きでいつも優しい校長先生」である遠藤知恵美校長先生はじめ、34名の教職員がいることとし、教職員名簿を作成した。また、海・山の自然に恵まれ、農業地域・漁業地域・商業地域が混在する合併直後の町にある学校とし、学校地図も準備した。このようなイメージの下、授業を進めていった。

履修学生をグループに分け、1回の授業を1～2グループに担当させた。毎回、担当グループの学生が、事前学習を行い、レジュメ・資料を作成し、当日の運営を行わせた。

「養護学演習Ⅰ」の最初の頃は、学生だけで考え、資料のチェックのみを受けて学習に臨ん

だが、学生側から、事前に資料提示の方法や授業運営に関する指導助言をもらいたいという申し出があり、演習の事前学習に際し、担当学生は教員の指導を1～3回受けるようになった。しかし、指導というよりできるだけ学生自身が考えられるよう、考え方の方向性についての助言や参考資料の紹介程度の助言に留めることとした。

当日は、担当学生が事前に調べてまとめ、計画した当日の運営について、資料等を配布し、演習のリーダーとして授業を進める。担当学生からの提案事項や説明に対し、討議・検討を行う、個別保健指導のロールプレイングを観察する、職員会議を想定してロールプレイングに参加する等、多様な学習体験を行う。演習の最後に小レポートを作成して終了する。

担当グループは、討議や検討に関するまとめのプリントを作成し、翌週、配布する。

養護学演習Ⅰの授業の具体例として、「4. 保健室経営案の作成」では、以下のような展開がされた。

概要は、担当学生が自分たちの作成した保健室経営案を提示し、検討するものであった。授業の進行は資料を提示する担当学生が行った。授業は、講義室で行われ、可動式の机いすをグループごとにまとめて使用した。

授業のはじめに前時の学習をまとめた学生のプリントが配布され、前時の想起を行ってから本題に入った。作成者は、想定した小学校の教育目標等を受けて保健室経営案を提示し、説明した。グループ討論を行い、グループ毎の意見が出されたが、保健室経営案の根拠となる子どもの健康課題をわかりやすく示し、対応目標や具体的な対応策を段階的に示してほしいという意見が出された。また、子どもの健康課題の背景や要因を分析した上での保健室経営案にすべきという意見も出された。その後、保健室経営案の柱となる目指す子ども像を「～できる子」と表現すべきか、「～する子」と表現すべきか、具体的な到達度をもとに活発な討議が行われた。担当学生は考えを練った上での保健室経営案を提示しており、質問や意見に対して根拠を示して応える、新たな意見をどのように取り入れるか確認する等して深め、翌週までに修正した保健室経営案を提出することとして授業が終了した。

養護学演習Ⅱの授業の具体例として、「12. インフルエンザの流行への対応」では、以下のような展開がされた。前時の想起の後、担当学生が「本時の進め方」について確認し、「インフルエンザの症状について」「学級閉鎖の基準について」、プリントを用いて説明した。その後、担当学生が健康観察の結果の罹患児童数（％）、出席罹患児童数（％）を提示し、養護教諭としてどのような対応をとるか、学校としてどのような対応（学級閉鎖や臨時休業等）をとるか、どのような事後措置を行うか検討した。提示された資料では学級によって罹患率の大きな違いが見られたことから、学校としての対応にとして、「特別支援教育学級は、欠席率が高いのですぐに学級閉鎖にしたほうがよい」「1年生は抵抗力が無いから、早期に学級閉鎖にしたほうがよい」「兄弟関係を考えると学校閉鎖のほうが効果的ではないか」等、意見が出された。閉鎖時期に関しても、「3時間目以降帰して、他のクラスへの蔓延を防ぐべきである」「給食費を払っているし、急に給食をとめることができないから給食を食べさせてから帰したほうがよい」「今日

中に保護者に連絡がつくかわからないし、留守家庭に子どもを帰すのは危険であるから、翌日からの閉鎖でよい」等の意見が出された。

今回は、出席罹患児童を出席停止とし、明日から1学年児童の学級閉鎖、ほけんだよりや通信で保護者に学校の様子を伝え、週明けの状態をみて次の対応をとることとした。本時担当学生が学習のまとめを次週に配布することとし、指導教員の講評後、小レポートを書いて終了した。

「養護学演習Ⅰ」「養護学演習Ⅱ」の授業の内容は、初期に設定した青空市立花園ことり学校での実際の活動として展開され、学習が進むにつれ、学生がリアリティを以って課題を提示し検討することができるようになった。

5. 「養護学演習」での学生の学び

養護学演習について、授業担当教官として「養護学演習は、養護実習のように学校現場で実際に働くことはないが、考えるプロセスがすでに実習といえる。正しくものを見る力を養い、改善することは常に必要な力である。学生のみなさんが完璧を目指して提出した資料であっても、よりよいものにしていくために活発な意見交換や検討が必要である」と述べた。学生が、このことをよく理解したことが、小レポートの記述から把握できた。

「養護学演習Ⅱ」に関する記述で、「常によい緊張感と仲間と一緒にやりとげる達成感に満ちていた。今までの学習や養護実習のさまざまな知識や経験を、この養護学演習では総合的に扱う授業だと感じた」「養護学演習を通して、物事を養護教諭としての視点で考えられるようになった。配布された資料をただ読んで納得するのではなく、これで本当に円滑に進められるか、この文書で、保護者や児童生徒に伝えられるのか、先生方と情報の共有ができ、ともに行動できるのか、このようなことを考えられるようになった」「学校とは、さまざまな分掌や職員で構成されており、児童の学習や生活を支援する集団組織である。そのため、教育課程や年間行事を念頭に、先を見通しながら、行動することが必要だと感じた」等に示されたように、授業というよりも実習に対する記述のようであり、「養護学演習」の授業を学内実習の実践の場として受け止めたことがわかった。

また、「養護学演習ⅠおよびⅡ」は同様の進め方をしたが、このような授業に慣れたこと、「養護学演習Ⅰ」は養護実習と併行するのに対し、「養護学演習Ⅱ」は養護実習終了後に行われたことから、学生自身がⅠとⅡに対する学習態度の違いを分析している。「養護学演習Ⅰでは、ただ調べてまとめたことを読むだけだったが、養護学演習Ⅱでは伝わるようにと心がけ、資料にも工夫し話し方や目の配り方に気をつけ、こちらから問いかけるようにもした」「養護学演習Ⅰでは、うまく話すことができななかったが、Ⅱでは『結論から述べる』ことに気をつけ、養護実習を思い出して『具体例を挙げる』ことにし、少し上手に話せるようになったと思う」「前期はこんな感じでいいんじゃないかという妥協があった。調べてわかったつもりで本当は理解していない資料を出し、質問にうまく答えられなかった。この反省を踏まえ、後期は根拠や理由を徹底的に考え、たくさん調べるようにした。質問も予測して、こういう質問が出たら、こう答え

ようと打合せを行った」等の記述に見られるように、学生自身が前期の学習を振り返り、課題を見出し、課題解決のために努力したことがよくわかる。

本授業はグループ活動で進められたが、「グループワークを通して、自主性や積極性を伸ばすことができたと思うし、ディスカッションでは異なった視点や考え方から学ぶことが多く、全体的に楽しく協力的に取り組むことができ、グループのみんなに感謝している」「コミュニケーションが欠かせず、全員で話し合うことを念頭に活動した。意見を述べる際もグループの意見として発表することから、発表者個人の意見でなく、全員の一致した意見を総合して述べた」「個人が意見を主張するのではなく、集団の一員として、どのように行動すれば作業がスムーズにできるかを考えることが重要だと感じた。また、予想外の質問が出て混乱しないよう、事前に共通の認識・理解を深めるとことが必要なことだと思った」など、協働することの大切さや必要性を体感したことが把握できた。このグループ活動に関しても、「養護学演習Ⅰ」と「養護学演習Ⅱ」とで変化しており、「グループディスカッションでは、前期よりも活発に意見交換をできたと思う。ただ自分が感じたことや考えたことを発表しあうだけでなく、他の人の意見について一緒に掘り下げて考え、学びの深い討議ができたのではないと思う」「前期はグループの打合せに遅刻する人が必ずおり、打合せが始まっても積極的に発言する人が少なかったが、後期は毎回リーダーを変えたことで積極性も出てきて、それぞれできることをやり、教え合い、よい状態で最後の授業が終わったので全体的に満足している」等の記述に見られるように、「養護学演習Ⅱ」でより充実したものとなっていた。

学生の中には、この授業を機会に、授業への興味関心が変化した者、積極性が変化した者も見られた。「この授業で、文書を作成すること、人の話を聞いて理解することが身についたと思う。これが身について、講義が楽しくなった。これが、大きく変わったことといえる。『授業が憂鬱、受けていても興味が持てない』ということが、特に、養護学演習Ⅱでは全く無く、むしろ『具合が悪いけれど、どうしても受けたい』と思う講義であった。毎回、友人の作成した資料をもとに理解が深められるということは、恵まれた学習環境であると感じたし、お互いの大変さ、苦勞がわかるからこそ、みんな授業が楽しく、真剣に受けることができたと思う」「自分から積極的に話しかけたいと思うが、なかなかできない。しかし、養護学演習Ⅱでは、自ら多く意見を述べるように取り組んだ。そのことで自信がつき、以前より積極的になれた。ふだんの生活でも自分のできるところから行い、挨拶をしっかり行い、発言を求められた際には積極的に意見を述べるようにしたい」等が、その例である。

「この授業を受ける中で『どうしてこのような授業の形式や内容なのだろう』ということをよく考えた。それは今まで、『授業は先生が主体的にすすめるものである』という考えが強く、養護学演習の授業形式が今までに無いものだったからである。しかし、この授業で、受身でなく自主的な姿勢を養うことができた。課題に取り組み、問題点を話し合うことにより、より学びを深めることができた。学生主体とはいえ、簡単にはいかず、資料作成や進行などつまづくことがあった。しかし、協力して授業を作ることにより、一人ひとりの意識が高まり、お互い

に刺激しあいながら学ぶことができ、養護教諭を目指すうえで大変貴重な学びとなった。」等の記述に見られるように、学習効果が大きく、養護教諭の実践は、実習を通して学ばせる必要があることを確認した。

しかし、演習科目であるため、実習科目に比べると時間が短く、学生ひとりひとりが学ぶ時間や場面を整えることが難しいことから、「養護活動実習」のような名称で養護教諭としてのスキルアップに必要な授業時間や「養護活動実習室」等を整備し学習環境を確保することが課題である。

Ⅳ おわりに

本稿では、「養護学演習」とはどのような授業か、学生は本授業に対しどのような学びを得たか、概要を示したが、今後は1回1回の授業のねらいと内容をこまかく分析し、本授業における学生の学習効果を把握したい。特に、養護学演習Ⅰから養護学演習Ⅱにかけての学生の変化の理由と背景を明らかにしていくことが課題である。

「養護学演習」を、学生は「仲間とつくりあげるもの」と主体的に捉えていたが、授業担当者である筆者自身も学生とともに授業をつくっている喜びを感じ、毎週の指導助言の時間および授業時間が楽しみとなっていた。今後も授業実践と分析を重ね、授業の充実を図っていきたい。

文献

- 1) 平成9年教育職員養成審議会第一次答申
- 2) 戸渡速志：今後の教員養成・免許制度の在り方について，日本養護教諭教育学会誌，9（1），2－5，2006
- 3) 文部科学省：今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申），4．教員養成・免許制度の現状と課題，http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/06071910/005.htm
- 4) 理事会：日本養護教諭教育学会の英語表記に関する検討の経緯について，日本養護教諭教育学会誌，7（1），95－102，2004
- 5) 大谷尚子：専門職業人養成におけるコア・カリキュラム—日本教育大学協会全国養護部門の研究成果と今後の展望—，日本養護教諭教育学会誌，9（1），12－17，2006.
- 6) 前掲書5)，2
- 7) 日本教育大学協会全国部門研究委員会：養護教諭の資質向上を目指したモデル・コア・カリキュラムの提案（2），34－38，2006
- 8) 後藤ひとみ，大西真由実：養護教諭の実践力育成に向けた学内実習「養護活動実習」の展開と効果，第53回日本学校保健学会講演集，310－311，2006
- 9) 後藤ひとみ：養護教諭の実践力育成にむけた学内実習「養護活動実習」の展開—仮想学校

- を舞台にした授業の構成一，愛知教育大学教育実践総合センター紀要第11号，27-32，2008
- 10) 齊藤ふくみ，今野洋子，古賀由紀子，後藤ひとみ，小林央美，松田芳子：養護実践力の育成を目指す養護教諭養成カリキュラムの検討（第1報）－科目『養護概説』の分析－，日本養護教諭教育学会誌，vol11，No 1，53-62，2008，
 - 11) 前掲書9)
 - 12) 大谷尚子，松嶋紀子，小林冽子，後藤ひとみ：養護教諭養成教育のカリキュラム構造に関する研究，日本養護教諭教育学会誌，2（1），16-18，1999
 - 13) 前掲書10)
 - 14) 同上
 - 15) 後藤ひとみ：養成制度と教育－さらに求められる，教免法の改正や課程認定の充実－，子どもと健康，No80，48-53，労働教育センター，2005
 - 16) 秋田喜代美：教える経験に伴う授業イメージの変容－比喻生成課題による検討－，教育心理学研究，44，176-186，1996
 - 17) 羽野ゆつ子・堀江伸：教員養成系学生における授業実習経験による「教材」メタファーの変容，教育心理学研究，50，393-402，2002
 - 18) 木原成一郎・磯崎尚子・磯崎哲夫：教育実習生の小学校体育指導の心配に関する事例研究，日本教科教育学会誌，25，29-38，2003
 - 19) 深見俊崇・木原俊行：他者とのかわりによる教育実習生の実践イメージの変容，日本教育工学会論文誌，28，69-78，2004
 - 20) Wallace, J. M. : Training Foreign Language Teacher -A reflective approach, Cambridge University Press, 1991
 - 21) 佐藤学：教育方法学，岩波書店，136-139，1996
 - 22) 健康相談活動カリキュラム開発研究会：報告書 健康相談活動の理論及び方法－カリキュラム及び指導方法の開発－，2003
 - 23) 保健体育審議会：生涯にわたる心身の健康の保持増進のための今後の健康に関する教育及びスポーツ振興の在り方について（答申），28，文部省，1997
 - 24) 日本養護教諭教育学会：養護教諭の専門領域に関する用語の解説集〈第一版〉，2006